

第二次カムチャツカ遠征時日本沿岸への航海を行った艦船の航海日誌

——露日関係形成史における基礎史料として——

V・S・ソボレフ

第二次カムチャツカ遠征の基本的な課題の一つに、日本沿岸への航海があった。この課題は、女帝アンナ・イオアノヴナの政府によって、「日本に向かう道の探索」として極めて具体的に立てられた。

この任務は、M・シユパンベルグ大佐【капитан】の支隊に課せられた。船隊は次の三隻から構成された：M・シユパンベルグ自身の指揮するブリガンティン型帆船「アルハンゲル・ミハイル号」、V・ウォールトン大尉指揮下の単檣帆船【парусов。郵便船。定期船。ガヴリイル号は古船を修復したものだ】から著者はこう言ったか。実際には単檣帆船。【「聖ガヴリイル号」、A・シユリテイング少尉指揮下のダブルスループ型帆船【двух-шлюпка】「ナヂェジダ号」。船隊は一七三九年日本沿岸への航海に成功した。絶えざる暴風雨と霧、しばしば方向を変える強い海流、という極めて複雑な気象条件の中をこの遠征隊は進んでいった。船隊はウルツプ島とホツカイド島に到達し、そこでロシア人は初めて隣国の領土に足を踏み入れ、土地の住民との接触に初めて成功、日本についての信頼に足る情報をも初めて収集され、当該地域の既存の地図もさらに正確なものにされた。

確認しておかなければならないのは、帝政ロシア政府が日本沿岸への遠征の結果に重要な意義を持たせていたことである。一七四〇年の始め、日本への航海についてのV・ペーリングとM・シユパンベルグの報告は

海軍省長官N・ゴローヴィンに提出され、更に、貝殻、樹木の枝、花卉など、遠征の成功を示すいくつかの「物的証拠」も届けられた。閣僚会議議長A・ヴォルインスキーはこのことを女帝アンナ・イオアノヴナに報告した。事の重要性に鑑み、直ちに女帝から、全ての報告と物品を即刻閣僚会議に移管するようにとの訓令が出された。それと同時に閣僚会議から海軍省関係者に対し、この件に付いては「何人にも口外せず、秘密裡にしておく」ようにとの指示が出された。

これら一連のことは、帝政ロシアの上層権力が、日本遠征の成功に特別な国家的意義を認め、それによる発見を秘密裡にすることを必要不可欠と見なしていたことを物語っている。これは、新しい領土獲得と将来的に見込まれる海上交易の成功に向けての意欲と結びついていた。この分野でのヨーロッパ諸国に並ぶ【рядом европейских государств】輝かしい成功は、どうやらロシア帝国の首都の一部の国家頭脳に興奮を与えたようだ。

と同時に忘れてはならないのは、M・シユパンベルグ支隊の航海が成功したことは、第二次カムチャツカ遠征に費やした膨大な国家支出を正当化する理由のひとつとなったことである。

ロシア国立海軍文書館には、M・シユパンベルグ支隊の全ての艦船の当直日誌が保存されている。これら史料は、その性格において類を見な

いものであり、その内容も十分に客観的である。当直士官による日誌には、航海中に生じた全ての重要な出来事について日々の記録が記され、しかも、その記録は出来事のすぐ後に書かれていて、そのことがこれら歴史基礎史料の持つ信頼性を高めている。

これらの史料が研究者にとって格別な興味と価値を持つもう一つの理由は、両国民と両国と相互関係の初期段階の歴史に関して、最も早い時期に収集され今日知られている基礎史料【источники】の一つだからである。

この手書きの日誌は、十八世紀前半の公式草書体【служебная скоропись】の典型的なもので、そのことから、解読と転写【транскрипция】には複雑な作業を要する。

我々が研究対象としたのは、アルハンゲル・ミハイル号、聖ガヴリイル号、ナヂエジダ号の三隻の船の一七三九年の当直日誌である。研究に当たっては、如何なる情報であれ、露日相互関係の形成史【история становления】に関するものが含まれていると思われる記録は、すべて精査した。

得られた情報は集積され、分析を施された。それらを学問的に体系化した結果、得られた事実史料はすべて、以下の三つの分野別の基本グループに分類することが可能であると判断した。

自然条件の記述

民族学的情報

土地の住民との接触に関する史料

1、自然条件の記述

日本沿岸に到達したロシア人船乗り【моряки】たちが、自分たちが

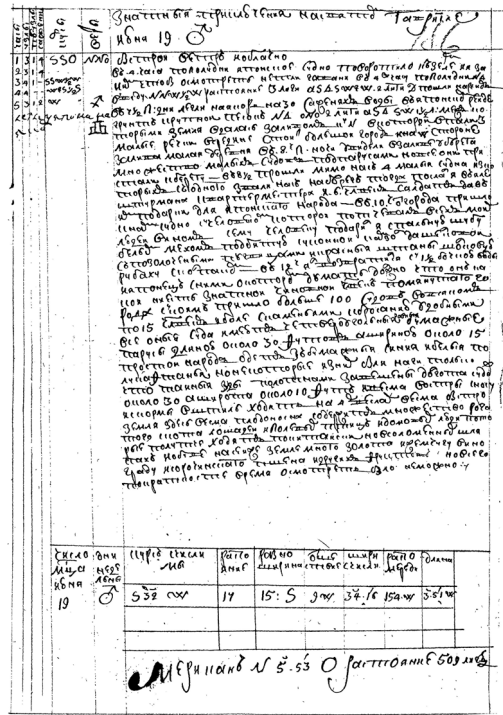
未知の地域の最初の発見者であると思なしたのは根拠のないことではなかった。従って彼らは、全ての自然現象は、如何に些細なことであれ、注目と記録に値すると考えていた。

例えば、一七三九年六月一九日の単檣帆船【лакетот】聖ガヴリイル号の当直日誌の中に、日本沿岸からほど遠くないところでの定時停泊【очредная стоянка】の記述が出てくる。「小さな川が三つ流れ込んでいる湾。中央に大きな町が、湾の東側には小さな村がある。この土地は極めて肥沃で、牛、馬、野鳥が多く棲息している」⁽¹⁾。

我々から見ると興味深いのはこれに続く記録で、そこでは、当直士官が、新たに発見された島での「無限の富」の探索という、ペテルブルグから受けとった訓令の中にある具体的な課題にあたかも答を出そうと試みていることがうかがえる（このことは、言うまでもない理由により、帝政ロシアにとって格別に興味あることであった）。このような課題設定との関連で日誌に次のように記してある：「たとえこの土地に金や真珠、葡萄やサラセン・キビ（原註：米のこと）、その他の果実が大量にあったとしても、時間がわずかしかないために全てを調査することは不可能だった」⁽²⁾。

同船の数日後の日誌には、他の島を乗組員たちが訪れた際の様子が記されている。真水の探索と「調査のために」（すなわち、島の自然特性を記述するために）小船が島に向かった。その日のうちに乗組員たちは島から、「幾らかの草、真珠貝二個、果実の付いた木の枝、辛子まで付いた枝まである【山椒のことか】⁽³⁾」といった貴重な「戦利品」を船に持ち帰った。何はさておきこれらの品のこと、閣僚会議議長A・ヴォルインスキーによって女帝アンナ・イオアノヴナに報告された。

士官たちは、新たに発見された島の地名に関して初めて得られた情報についても当直日誌に記載した。例えば、一七三九年六月一二日にダブ



ルスループ型帆船【Русель-шпонка】の当直士官は次のように記している：「島が目に入った、これは「ニユチマ島」である。更に右側にもう一つ、距離は我々から一・五オランダ・マイル。住民の話では、この島の名は「デイクンジル」である」。

一七三九年七月四・五日、ブリガンティン型帆船アルハンゲル・ミハイル号の乗組員たちが「フィグルヌイ」と【ロシア人によって】呼ばれていた島を訪れた後の当直日誌に、興味深い情報が含まれている。最初の日島に上陸した乗組員たちは真水一樽を持ち帰ったが、彼らが伝えたこととして島の自然条件について次のようなことが記されている：「その島には白樺と樅の森が自生し、スイカズラ、ねず【береза】に似た別の種類のもの、甘草【Травя сладкая】、ユリ【сирани】、スグリ、その他に、知識がないため何と書いてよいか分からない草が生えている」。

翌日乗組員たちは、「岸から葡萄の枝と様々な花」を持ち帰り、更に

「その島で七人の人間と、彼らが捕まえようとしたが捕まえられなかった犬を見た」。

犬は島民が食べようとしていたものであることはまず間違いが、【乗組員たちによる】それを実際に確認する試みは不成功に終わった。

特に指摘しておきたいのは、日本沿岸での最初の水路調査はロシア人によって為されたことである。例えば、ブリガンティン型帆船アルハンゲル・ミハイル号の当直日誌には一七三九年七月六日付で、「舵手ペトロフは、フィグルヌイ島の入り江の調査、特に水深の測量と、停泊に適するかどうかを調べるよう命ぜられた」と記されている。

これらの行動は、将来日本沿岸に向けてロシア船が航海する際の安全を確保せんとする試みとして評価されなければならない。その後歴史はめぐって、二〇年後にロシア軍艦が日本のこれらの【かつて調査された】湾（複数）に寄港することは実際に常態化し、一七三九年の遠征で得られた結果が後代のロシアの船乗りにとって役に立つこととなったのである。

2、民族学的性格の情報

ロシアの船乗りたちは、新たに発見された地域の住民たちの生活様式、特徴的な風習、風俗、すなわち民族学的特性に新鮮な興味を示した。従って、当直日誌にはそれらに関しても然るべき記録が残されている。

例えば、ダブルスループ型帆船【Русель-шпонка】ナチエジダ号の当直士官は一七三九年六月二三日の日誌の中で、実際に住民に出会った際の第一印象を次のように記している：「彼らの衣服は木綿で中に綿が入っており、その上に草を編んだものを締めつけて、湿度の高い気候のため帽子も草で出来ている。ズボンに着用していない。髪は上にまとめて括ってある」。

一七三九年七月九日八人の日本人がブリガンティン型帆船アルハンゲル・ミハイル号に上船してきた。この出来事については、詳細な記録が当直日誌にも残されている。ロシアの船乗りたちがこの遭遇から受けた印象は鮮明で、彼らの目からみた日本人は、「クリール諸島民族と顔つきが似ていて、長い彩り鮮やかな衣服の上に様々な緞子を縫い付けたものを着用し、裸足で歩いている。足と体は毛で覆われ、あごひげは大きく、長く、黒い。或る者は銀の耳輪をしている」⁽⁹⁾。

ロシアの船乗りたちは、日本人の乗っている船に特別な、言ってみれば職業的な興味をしました。例えば、一七三九年六月一七日単檣帆船【Takerfoot】聖ガヴリイル号の当直士官は日誌に次のように記している：「島から出ていく船を三九隻目にした。私はそれらを商船と判断した。

いずれもマストは一本で、帆は四角である。一部の船は帆が白地に紺の縞模様で、他は全て白色である」⁽¹⁰⁾。

翌々日一七三九年六月一日、同上日誌に同じ主題の新しい記録が記された：「一〇〇隻以上の船が近づいて来た。帆は全て四角で、長さ約三〇フィート、幅約一五フィートの滑らかな木綿製である【原註：一フィートは約三〇cm、従って帆のサイズは九m×四・五m】。船体は、長さは約三〇フィート、幅約一〇フィート【原註：九m×三m】、船先と艫がかなり尖った形をしている。風の時は四本の櫓で漕ぐが、船足は極めて速い」⁽¹¹⁾。

おそらく、ロシアの船乗りにとって、この分野での日本人の経験は極めて興味深かったはずである、というのも、島国である日本は深い航海伝統を有していたからである。

よく知られているように、ロシアの船乗りたちは、真水、食糧、薪の蓄えの補充に一度ならず上陸をした。しかしながら彼らは、起こり得るかもしれない衝突を危惧して、日本人の村落には入らないようにして

いた。従って、日本人の居住地点をある程度の距離から興味を持って観察をした。例えば、一九三九年六月一日のブリガンティン型帆船アルハンゲル・ミハイル号の当直日誌に次のように書かれている：「…四個所で住居を目にした。住居の近くには穀物が植えてされているのが見えたが、種類までは分からなかった」⁽¹²⁾。つまり、距離がかなりあったので、船乗りたちには畑に植えてあるものまで特定することが出来なかったのである。

日本人の取った行動の或る部分はロシア人の驚きを呼んだ。例えば、上で挙げた一九三九年七月九日のブリガンティン型帆船アルハンゲル・ミハイル号上での出会いの際、船上で生きた鶏を見て日本人は「鶏の前に跪くと、両手を唇に持っていき、深々と頭を下げた」⁽¹³⁾。

ロシア人の行動や風習の或るものが、日本の島々の住人を驚かせたであろうことは、想像に難くない。

双方の民族および文化の相互認識の端緒が開かれことが、M・シユパンベルグの遠征の良き成果の一つであったと言ってよい。

3、土地の住民との接触に関する資料

知られているように、日本の島々で住民との接触を実現するために、M・シユパンベルグ支隊にクリール諸島の出身者が数人加わっていて、彼らには通訳の役目が課せられていた。残念なことに、それらの者は日本語が余り出来ず、土地に住民との接触は困難を極めた。

この状況は当直日誌からもよく伺える。例えば、一七三九年七月八日二隻の日本の「小舟」がダブルスルーブ型帆船【ryōgen-umonaka】ナヂエジダ号の傍を通り過ぎた時、日本人たちはロシアの船乗りになんか伝えようと試みたが、ロシア人たちは理解することが出来なかった。「日本人たちが何か言っても、我々は言葉が判らない」⁽¹⁴⁾と、当直士官は日誌に

記している。翌々日の一七三九年七月一〇日日本人たちはナチエジダ号の乗員【(17)】は【Komahara】との接触を図ろうとした。日誌には次のように記されている：「当船とブリガルチン船の間に三隻の小舟が止まって、我々に向かって大声を上げ、自分たちの住居を指さしながら手を振った。何を叫んでいるのか我々には分からない」⁽¹⁵⁾。

それでも、「クリール出身」のロシア乗組員の助けを借り、大変な苦勞の末、やっと土地の住民との対話が成功した。一七三九年六月一九日、真水と薪を入手するために「日本人への贈り物」と乗組員八人を乗せたボートが単檣帆船【Hakerfoot】聖ガヴリイル号から出された。艦に必要な物は全て日本人から喜んで提供された。のみならず、乗組員たちは日本人の村落で大変な歓待をされ、選りすぐった果物と土地の酒が振る舞われた。この酒は、「色が褐色で、舌触りが良く、アルコールの含有度は相当なものだった」と、後に乗組員たちは回想している。酒の入った小さな容器が艦長のV・ウォールトン大尉への贈り物として持たされた。同日、村落の住民が艦に答礼訪問にやってきて、全員に贈り物がなされた。ロシアの乗組員が酒を馳走になった家の日本人に、艦長は最も高価な贈り物をした：「…白い毛皮裏打ちの付いた就寝用の毛皮の外套、羅紗の胴衣、金張りのボタンの絹の胴衣、赤いズボン、帽子の付いた絹の長衣」⁽¹⁶⁾。

聖ガヴリイル号の水兵たちも、シャツ、靴下、その小物を日本人たちに売った。代金として水兵たちは、「土地の銅貨を山ほど」受け取った。その銅貨は「中央に四角な穴があってそこ紐を通して持ち運ぶのであった」

一七三九年六月二二日単檣帆船【Hakerfoot】聖ガヴリイル号に再び日本人がやって来た。艦長の要請に従って飲料水と薪を運んで来たのである。代金として「ガラス玉一フント」⁽¹⁷⁾（原註：一フントは四〇九g）。

我々から見て、研究者にとって非常に興味深いと思われるのは、一七三九年六月二二日の日誌にある日本人との接触の記録である：「…我々のところに日本人が漁船に乗ってやって来て、舟に横付けした。彼ら日本人は我々に、カレイと、ヨーロッパでもアジアでも見たことのない四種類の魚、更にサラセン・キビ（米）、幅広の大きな葉、煙草、かぶ、キュウリ、その他細々したものを運んできて、そのうちの幾らかは売買対象となった」⁽¹⁸⁾。日本人がロシアの乗組員から最も喜んで買ったのは、羅紗、亜麻製の衣服、紺色のガラス玉であった。

M・シユパンベルグ大佐が日本人から買ったのは「ダカット金貨」で、形は長方形で、金は「極めて純度が高く」、重さはロシアの金貨の十分の七であった。

一七三九年七月九日にはアルハンゲル・ミハイル号に、土地の住民総勢八人から成る代表团がやって来た。この樁事について当直日誌に次のように記してある：「マルティン・ペトロヴィチ・シユパンベルグ大佐閣下は彼らを大歓迎し、ウオツカを振る舞い、中国とロシアのタバコ、金銭、染め麻布、ガラス玉、貴金属の小塊を贈った。異国人たちは我々の船から自分たちの村に向かった」⁽¹⁹⁾。

しかしながら、ロシアの船乗りと土地の住民との接触がすべて友好的雰囲気の中で行われたわけではない。双方が時折見せた或る種の警戒心と不信感是十分に理解、説明できる。二つの異なった文明が初めて遭遇したというのが事の本質だからである。

例えば、一七三九年六月一九日単檣帆船【Hakerfoot】聖ガヴリイル号に岸から「高級役人」がやって来た。多数の供人と彼を取り巻く者の恭しい態度からして、村落の長と思われた。当直日誌には特に、その役人に「一〇〇隻以上の船」が同行し、「それぞれの船に一五人以上が乗り組み、投げけるのに手頃な石が積んであった」⁽²⁰⁾。ことが記録されている

(艦長は、これらの「重さが二から三フント【約八〇〇gから一・二kg】」の石は投擲弾として使用される可能性があるを見た。夕刻が迫った段階で、日本船が艦をより密に取り巻いたことが見て取れた。そこでM・シユパンベルグは、夜間そこに留まることは好ましくないと判断し、艦は外洋に出た。

ある時、V・ウォールトン大尉と数名の水兵が或る村落の住民に客として招かれ、大尉たちの乗ったボートは岸まで曳船で先導された。しかしながら、日本の港に近づいたところで、日本側の監視船が近づいてきて、「立ち去るようにと命令が出され、外洋に戻るよう合図した」とV・ウォールトン自身が日誌に記している。この出来事ではおそらく、住民の平和的な気持ちと権力側の人間の立場とは合致していなかったのだろう。

いずれにしても、M・シユパンベルグの遠征の主要な成果の一つが、ロシアの船乗りたちが日本の島々の住民との最初の友好的接触の確立に成功したことである。これは、我々の考えでは、両国民の相互関係の形成の中での意義深い契機となったのである。

最後に結論として、第二次カムチャッカ遠征に参加した艦船の当直日誌は、露日関係の初期段階の歴史に関する興味深いかつ価値ある基礎史料【источник】であることを確認しておくことは無駄ではないであろう。

今後この史料が継続的により深く研究され、公刊されること不可欠と思われる。

サントクトペテルブルグ

二〇〇六年八月

翻訳：有泉和子（東京大学史料編纂所学術支援専門職員）

【註】

- (1) Российский государственный архив Военно-Морского Флота (далее - РГАВМФ). Ф.913. Оп.1. Д.38. Л.186.
- (2) РГАВМФ. Там же.
- (3) Там же. Л.188 о6.
- (4) Там же. Д.47. Л.26 о6.
- (5) Там же. Д.38. Л.76 о6.
- (6) Там же. Л.77 о6.
- (7) Там же. Л.78 о6.
- (8) Там же. Д.47. Л.17.
- (9) Там же. Д.38. Л.81 о6.
- (10) Там же. Л.185.
- (11) Там же. Л.186.
- (12) Там же. Л.60 о6.-61.
- (13) Там же. Л.81 о6.
- (14) Там же. Д.47. Л.24 о6.
- (15) Там же. Л.25 о6.
- (16) Там же. Д.38. Л.186.
- (17) Там же. Л.187 о6.
- (18) Там же. Л.64 о6.
- (19) Там же. Л.81 о6.
- (20) Там же. Л.186.
- (21) Там же. Л.187 о6.

日本の皇族と政府高官に対するロシアの叙勲

A・R・ソコロフ

ロシア国立歴史文書館（以下、歴史文書館）のフォンドには、褒章に関する史料は全体として数量的に多くはないが、それらは、日本からの賓客のロシア訪問を扱った他の史料群と不可分の一体を成している。従って、褒章についての問題は全て、訪露に関するこれら史料を考察する中で初めて明らかにすることができる。

露日関係史に関する歴史文書館所蔵の大量の史料の中で見逃すことが出来ないのは、様々なフォンドの中に相当量ある日本皇族のロシア滞在に関する史料群である。これら史料の大部分は、様々な接待指示【*костылевские распоряжения*】と式典関係の書類からなるが、中でも極めて興味深いのが、日本の親王とその随員に対してロシアの勲章およびその他の記念品が授与された【*пожалован*】、ことに関する史料である。なお、ロシアに偶然たどり着いた普通の日本人に対する褒章に関しても十九世紀初頭の証左が残されている。

一八世紀初頭から一九世紀中葉までの露日関係は、通常とは全く違った発展の道筋を辿ってきた。日本は外国人にとって閉ざされていて、住民は独自の「鉄のカーテン」の内側にあつて出国の権利を有していなかった。しかしその一方で、日本政府のこのような政策は、ロシア帝国の領土内に最初の日本人が入ってくることを間接的ではあるが助長することとなった。というのは、日本が「閉鎖」を旨としたことにより船舶運航の発展が禁制され、その結果、日本の船がカムチャツカ沿岸でしばしば遭難し、ロシア人と日本人との最初の接触が生じることとなったのである。

る。

エカテリーナ二世治世以降、漂着日本人は祖国に送還されるようになった。これは、東方の隣人との関係を取り結ぶ目的でなされたもので、それら日本人たちは生活を十分に保障され、送還に際しては「様々な品々が贈られた。もちろん言うまでもなく、彼らに対する何らかの公式的な褒章というものはありえないにしても、少なくとも、史料群の中に記されていることから、様々な記念品、つまり、時計、シガレットケース、装飾品等々が贈呈されたことが判明する。例えば、一八〇三年のロシアの「世界一周」遠征に同行し、ロシアから日本に送還された十人の日本人に対する贈り物のことを伝える史料が存在する。彼らのうち二人には金時計が、他の八人には銀時計が、また全員に例外なく金貨二〇枚【*20 серебряных*】金貨一枚は五あるいは十ルーブルが、それぞれ下賜されている。また、病気のため同胞に合流出来なかった十一番目の日本人にも、彼のために用意された時計と金銭が発発の際に与えられた⁽¹⁾。

一九世紀の中葉のいわゆる「不平等」条約締結後、日本皇族がヨーロッパとロシアを積極的に訪問するようになった。一八六二年サンクトペテルブルグに日本の公式使節団が、また一八八七年にはロシア帝国の首都を日本からの最初の皇族であるコマツ【小松宮彰仁】親王と同妃が訪れている。

コマツ【小松宮彰仁】親王は、日本皇帝の直系の叔父に当たり、ロシアを二度訪れている（二度目は一九〇二年）。この二度に亘る訪問に関